

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 神楽陽子

挿絵 赤賀博隆

第一章	マジカル・ワン・トゥー・スリー！	006
第二章	女怪盗、恥辱の肉体手品	037
第三章	ナイトミーナ貞操の危機	086
第四章	生徒会長、秘密の肉体手品	117
第五章	ナイトミーナ、連続男根裁き	184

登場人物紹介

Characters



あいほらみ な
愛原美奈 / ナイトミーナ

昼は誓瑛学園の生徒会長を勤めるが、夜は怪盗ナイトミーナとして活躍する義賊の少女。大怪盗の父と、一流マジシャンの母の血をひく。

いとうまこ
伊藤真子

美奈の幼なじみで親友の少女。誓瑛学園に通うちょっと気弱げな女子生徒。

かねなり
金成

黒い噂の絶えない悪徳な資産家。豪邸に住む肥満の男。

第三章 ナイトミーナ貞操の危機

意識を取り戻したミーナは、仰向けになつて寝ていることに気がついた。まだ金成邸の地下で、たくさんの観客が薄ら笑いを浮かべて彼女の肢体を眺めている。

「ふえふえふえ、お目覚めですかな怪盗ナイトミーナ」

傍では金成が顔じゅうの肉を歪ませて笑っていた。彼から距離を取ろうとしたが動けない。ナイトミーナは「大」の字の形をしたガラスケースの中に閉じ込められており、さらに手足をベルトのようなもので拘束されていた。漆黒のグローブをはめた両腕を左右に広げさせられているために、はだけた巨乳を隠せず、ハイヒールを履いた両脚も同様に縛られているので、股布を片方に寄せたままの股間は丸見えになっている。

真つ赤になつた割れ目は、先刻の菌車による凌辱の激しさを物語っていた。恥丘から太腿に至るまでが愛蜜で濡れており、腫れあがつた陰核はまだヒクヒクと疼いている。ボディースーツの短い前垂れや、隙間のあるフレアスカートでは股間を隠せない。

「こ、今度はなにをさせるつもりよ」

ミーナはガラスの中から金成を睨みあげた。桃色の髪が蝶ネクタイや二の腕に絡まっている。まだ先刻の凌辱の疲れが残っているらしく、彼女の吐息は少々荒い。

「大」の字で拘束されているので動けなかったが、それでも脱出する方法はないかと思つて首を捻ってみると、ガラスの箱に穴が空いていることに気がついた。ケースが透明なのでわかりづらいが、よく見ると、直径五センチほどの小さな穴がところどころに空いている。

(……ケースに穴があるわ。あれと……なにか関係があるのかしら)

金成の傍にいる黒子たちは妙なものを持つていたので、それも気になった。ミーナが質問するより先に、金成が客席のほうを向いて両手を広げる。

「次はソードを使ったマジックでございますぞ！ これから、このガラスケースを何本もの剣で貫きますが、怪盗ナイトミーナは果たしてアレでしょうか？」

女怪盗が「アレ」なのかどうか賭けのお題らしい。

「ワシが確認しますゆえ、賭けはみなさんでお楽しみください」

金成の言う「アレ」がなんなのかミーナには見当もつかなかった。それよりも、黒子たちの持つているソードが気になる。

(あんなのを……この穴から入れてくるっていうの!?)

柄は剣のものだが、刃の代わりに生きたウナギがついていた。ぬめる軟体で黒子の腕に絡みついたり、体液の雫を落としたりしている。あんなものをけしかけられるのかと思うと背筋が凍りついたが、女怪盗の了承を得ることなく、悪趣味な手品は始まった。

「では怪盗ナイトミーナによるソードマジックを、ごゆっくりお楽しみください！」

ガラスの向こうから近づいてくるのは確かにウナギだが、いまは蛇くらい怖い。

(……ウソでしょ、本当に入ってくるの?)

最初のウナギはミーナの右肩の辺りから侵入してきた。巻きつかれてはたまらないので掴んでしまおうとするが、手首を固定されているためにどうしようもない。軟体生物の頭ははだけた乳房のほうを向いている。

「入ってこないで！ で、出ていきなさい！」

しかし生きたウナギは、照明の光を浴びて輝いている白い肌より、暗い衣服の中に興味があるようだった。羽毛で口を飾られたグローブの中に頭を潜り込ませてくる。

「ひっ!？」

マジシャングローブの黒い布地が軟体生物の頭部の分だけ膨れあがった。その膨らみがどンドン長くなっていく。絶えず動きまわる動物のヌルヌルした感触が、女怪盗の背筋に激しい悪寒を走らせた。唇を噛み締めて眉間に力を込める。

「きつ気持ち悪……ううう！」

連続する辱めで火照った肌を、冷たい生き物が這っていく。ところが冷たいと思っていたものが急に熱くなった。ウナギにしては生臭くなく、香りを嗅ぐと頭がわずかにクラツとする。そのウナギは金成が金にものをいわせて作らせた特別種で、体液が媚薬になって

いることなど、捕らわれの怪盗ナイトミーナにはわからない。

「ほれ、もう一匹いつてみましようか……ふえっふえっ！」

次のウナギは左腕にはめているマジシャングローブの中に潜り込んできた。細いグローブが紐状の生き物を肌に押しつけてくるので、ウナギのヌルとした感触を嫌というほど思い知らされる。あまりの冷たさに鳥肌が立つが、さっきと同様にすぐ熱くなる。

「くっ……くうう……こ、これくらい、どうってことないわ！」

両腕に隙間なく体液を塗り込まれているようで気味が悪い。早くも冷や汗をかいて呼吸を荒くする。しかし三匹目はすぐにもやってきて、彼女の右脚に絡みついた。腰を捻って逃れようとしても、肝心の脚が動かないのだからどうしようもない。

（今度は下から!? 何匹入れるつもりよ）

仰向けになっただけは下半身のほうがよく見えないので、突然襲われた気分だった。体液でボディスーツの後ろ垂れを濡らしたウナギが、続いてタイツの中に潜り込んでくる。軟体生物はその中で執拗にうねって、タイツの白い布地に黒い「S」の字や、数字の「6」を浮きあがらせた。汗ばんだ肌と湿ったタイツの間に熱い体液が染み渡る。

（我慢よ……ちよつとヌルヌルして、熱いくらいじゃない！）

唇を噛んで踏ん張れば、耐えられないほどではないと思っていた。しかし両腕と右脚に加えて、左脚にも軟体生物をけしかけられる。左脚の側でも右と同じようにタイツの中に

侵入されて、ぬめぬめとした液体を肌に直接塗り込まれる。

「……はあ……はあっ、ひあ！」

四肢が熱くなるにつれて鼓動が速くなったので、呼吸も次第に乱れてきた。腕や脚の筋肉を解されているようで不思議と心地よい。もちろん快感と認めたくはないのだから、顔を擧めて冷や汗を流すが、漏れる吐息はどことなく甘かった。露出した巨乳も頬と同じように汗ばんで、ふたつの乳頭は軟体生物の頭に負けないくらい硬くなっている。

グローブの中に潜り込んだウナギの頭はすでに手首に到達していた。怪盗の腕を拘束しているベルトには少しばかり余裕があるので、その内側をくぐってさらに手のひらまでやってくる。生き物の頭を掴んでやろうと思っても、熱い媚薬が指の付け根にも染み込んでいて力が入らない。ウナギは異様に長く、脚のほうではタイツの中を通して足首まで届くこともあった。

(ヌルヌルしてる……あ、熱い……)

手袋は黒いので見た目にはわからないが、内側は体液で湿布のように張りついてくる。汗を吸収した分マジシャングローブは重量を増しており、媚薬のせいでもるで力が入らない腕では余計に重く感じられた。しかし観客は腕よりも脚に注目している。

「私は知りませんでしたよ。ウナギはあのように泳ぐのですね」

ただでさえ薄いタイツの布地は鰻汁で透明さを増しており、黒い軟体生物の動きが丸見

えだった。女怪盗の肌の上を、確かに黒い紐状の生物が這っている。ウナギが小さな口で肌をすすると、ミーナは気持ち悪さとくすぐったさを同時に覚えた。

「っひあ！ やめ、やめなさい……はあ！」

しつこく塗り込まれる鰻汁でタイツも重みを増して、余計に脚にへばりつく。さらに新たなウナギがガラスケースの中に入ってきて、女怪盗のはだけた右肩に吸いついたのだからたまらない。どこに意識を集中させればよいのかわからず、軽く錯乱もする。

「……近づかないで……いい子だから離れて」

そんな彼女をもっと困らせるかのように、さっき入ってきたばかりのウナギが肩から蝶ネクタイを経て耳にまで上ってくる。軟体生物の体液が鳴らすヌチャヌチャという音が耳のすぐ傍で聞こえるのがおぞましい。耐えられなくなつて頭を左へ倒すと、今度はすでに侵入していた別のウナギと目が合った。

「きゃあ！ こ、こないで！」

頭をまわしたせいで豪快なツインテールを顔面に被ってしまった、はだけた右肩や胸の谷間にも桃色の髪が絡まる。その髪の隙間を、二匹のウナギがまるで海の中を泳ぐようにニョロニョロと縫っていくさまは圧巻だった。左側のウナギがぬめる胴体で鎖骨の膨らみを擦る一方で、耳の傍で音を鳴らしていたもう一匹が、体液で己の軟体に付着させた髪を引っ張りつつ蝶ネクタイに絡まってくる。

「ひあ！ はあ……あつ、はああつ」

顎と蝶ネクタイの間を軟体生物がゆつくりと這つていった。顎を引いて抵抗すればするほど、ウナギのヌルヌルとした感触を思い知らされる。昨日までは誰にも捕まえられることのない怪盗ナイトミーナが、何匹もの下等生物に手足と首を拘束されて、しかも喘いでいる。媚薬のせいで首から頬がカツと熱くなって、眉尻も次第にさがってきた。さらに別のウナギが彼女の背中の下に潜り込む。

（まだいるの!? ウナギだらけになるじゃない!）

ずっと悪寒を走らせていた背筋が媚薬によつて熱くなると、以降は軟体生物に対する気味の悪さが退いていった。心臓の裏側を温められているようで鼓動が速くなり、呼吸がまた荒くなるが、苦しさよりも心地よさを覚えてしまう。

（どうなつてるのよ……冷たいのが熱くなって……ああ、また熱い）

聡明なナイトミーナはウナギの体液がおかしいことに気づいていたが、考え込むだけの余裕はなかった。軟体生物がしきりに向きを変えるので、そのたびに驚かされる。桃色の髪だけでなく、山吹色のリボンも軟体に巻きつけたウナギが、次第に乳房のほうへさがっていく。

「じ、じつとして……お願い、だから……」

ミーナは紐状の生き物にそう言い聞かせたが、その声は甘く、火照った肉体は性感帯へ

の愛撫を期待しているようだった。たっぷり肉を備えた双乳の上にウナギが三匹集まってくる。それらは乳肌に着したままの母乳を餌と勘違いしたらしく、小さな口で吸いついてきた。

「だめよ！ それはご飯じゃないの、あつ……す、吸わないで！」

単に舐められるだけでなく、肉を啄まれもする。うち一匹は持ち前の軟体で胸の谷間を割ると、左側の乳房に巻きついて、その付け根を強烈に搾ってきた。先刻の金成による搾乳とはまるで違って、巨乳の下方とボディスーツの間といった細かいところまで愛撫される。痒いところに手が届くのと同じで、悔しくも心地よい。しかも紐状の生き物が塗り込んでくる体液は特別で、軽く塗られただけで乳首が勃ってしまう。

「もうウナギたちを手なずけてしまうとは。巨乳のたまものですな！」

ガラスの向こうでは観客が笑っている。客の言う通り、女怪盗は持ち前の巨乳でウナギに餌付けしているようにも見えた。ケースは透明で、ミーナは四肢を拘束されて動けないので、彼らの視線から逃れられないまま身体を軟体生物の好きにされる。今度は母乳で濡れた乳首を啄まれて、しかも引っ張られた。

（うそ、噛んで……も、もう、これ以上されたら……）

硬くなった乳首にウナギの小さな歯が食い込む。食い込んだ分、乳頭の先が膨らむような感覚がして乳腺が開いた。奥に残っていたらしい母乳が一粒ばかり漏れてしまう。軟体

生物はもつと出てくるとでも思ったのか、吸引する力をさらに強めた。

「ああ、おっぱいだめ、吸っちゃ……っはあん！」

ミーナの肩幅は狭い割に乳房が大きすぎるので、谷間にかかる圧力は凄まじい。そこに上方から侵入していたウナギが、体液でぬめる頭を下方へ一気に滑らせていく。普段異物と触れあうことのない胸の谷間にとって、媚薬は強烈で、今度は心臓の表側を温められるような感覚がする。

ウナギたちはボディスーツに染み込んだ母乳の存在に気づいたのか、乳房の側から紫色の布地の内側にも侵入を開始した。スーツに浮き出ていたおへその窪みをもつこりと膨らむ。誰も知らない怪盗ナイトミーナの衣装の裏側を、人間ではない下等生物ごときに知られてしまう、この屈辱。

「こ、このっ、やめ……んはあ！」

肌を隠すためのコスチュームもウナギが相手では役に立たない。軟体生物が思い出したように乳房を吸引すると、まだ残っていたらしい熱い母乳が乳腺を通過した。乳房の奥の肉が張り詰めるようで、体液を塗りたくられた乳首が熱く、ウナギの口を広げるくらい膨らんで硬くなる。

「……はあっ……はああ」

こんな変態じみた手品で感じているつもりはないのに、怪盗ナイトミーナの美顔は悦楽

に沈みつつあった。漆黒のグローブや、ほとんど透明になった白タイツや、紫色のボディスーツの表面だけでなく裏側を、無数の下等生物が這っていく。まるで全身を愛撫されているかのような表情で、眉はすっかり「八」の字になって、潤んだ瞳は蕩けている。常人よりずっと豊富な乳房や肉付きのよい太腿が、体液で濡れて鈍い光を放つと、観客が興奮を露にして罵声をあげた。

「機械の次は生き物で感じているようすな。これは手品でしょうか、それとも単にはしたくないですか？ ハッハッハ！」

ミーナは軟体生物による全身愛撫に抵抗するため、腕と脚に力を込めてガラスケースを軋ませた。しかしケースとは無関係に動くウナギたちには効果がなく、胸の谷間をまた首の側からお腹のほうへ通過されてしまう。

(はあ……だめ、感じちゃ……いけない)

胸の性感帯の一番奥まで隙間なく撫でられてはたまらない。うっすらと開いた唇で呼吸をまかないながら、時折思い出したように唾を呑み込む。ふと股間の疼きに気がついたとき、観客のひとりが声をあげた。

「金成さん、肝心なところにウナギが少ないようですが？」

ナイトミーナの秘部はまだウナギに這われていないというのに、身体のどこよりもドロドロで、牝ならではの香りをガラスケースの下半分に充満させるほどだった。軟体生物の

体液に負けないくらいたくさんの愛蜜がケースの底に流れ込んでいる。フレアスカートの
お尻の側やボディスーツの後ろ垂れは、蜜を吸収して色を濃くしており、そこをウナギが
通過するとネチャネチャといやらしい音が鳴った。陰毛のない股間では、赤く腫れあがっ
たクリトリスが嫌でも目立つ。

「おお、申し訳ない！」

金成の指示に従って、最後の黒子が軟体生物を追加した。今度の男は両手に剣を持って
いたので、刃代わりのウナギは二匹だった。媚薬の酸っぱいにおいも充満しているガラス
ケースの中で、二匹のウナギが早速あられもなく濡れた太腿に絡みついてくる。いままタ
イツの内側を彷徨っているものと合わせて四匹の下等生物に、美脚の輪郭を丁寧に、丁寧
になぞられる。媚薬を塗られることで生じた熱はすぐ傍の股間にも伝わった。

(熱い……はあ、気持ち……いいわけ……！)

ウナギの頭がいまにもハイヒールに到達しそうなのを触感しながら、屈辱と快感のあま
り潤んだ瞳で今一度スワン・ソーサーの無事を確認する。しかし早くもそれどころではな
くなった。胸のほうからボディスーツの中に入っていた軟体生物が、その中を散々這いま
わったあげく、ハイレグのほうから出ていく。

「ひあっ!? や、そんなところ……通っちゃだめ……っ！」

胸の谷間から右脚の付け根までを一匹のウナギが貫通した。敏感な箇所にはかり媚薬を

擦り込まれては、どうしても性感が生じて、吐息が色っぽく、観客を睨んでいたはずの視線も流し目になってしまふ。下等生物に嬲られるのは先刻の鹵車で果てさせられるよりも恥ずかしい。しかしウナギは容赦なく、怪盗ナイトミーナをさらに辱めた。

「あん、はあ……や、やめて……」

ハイレグのほうから頭を出したウナギが、彼女の腰を右まわりになぞっていく。黒いベルトが勝手に動いて、少女の細い腰を締めつけているようだった。紐状の生き物が進むのに合わせて、山吹色のフレアスカートも右まわりにめくられていく。さらにもう一匹がボディスーツの内側を、左脇から左脚付け根へのルートで貫通を果たして、ベルト代わりのウナギと一緒にスカートを折り曲げた。

(はあ……熱い、熱すぎる……ま、まだ終わらないの?)

股布を片側に寄せたままにいるために丸見えの恥部が気になって仕方がない。太腿に絡みついているウナギがすぐ傍を通過したときは思わず息も詰まる。ところがそれら二匹の軟体生物は、腔孔ではなく、餌にありつけそうなアナルに頭を近づけてきた。まさかそんなところに入ってくるとは思わなかったので対応が遅れて、不意を突かれてしまふ。

「ひあ！ うそ、そこはだめえ！」

先刻金成の指で散々解された菊門は締まらなかつた。いまも四肢を痺れさせている快感のせいで力も入らない。それでもなんとか肛門に意識を集中させると、軟体の感触を余計

に思い知らされてしまった。褐色の入り口が媚薬入りの体液で一気に熱くなる。

「はあっ、だめ……んあ、はああ！」

細くて長い軟体生物は容易く腸を逆行してきた。指のように関節がないので、腸壁を隙間なく擦られる。内壁が媚薬を塗り込まれて熱くなれば、まるで排泄寸前のようにお尻が疼いた。長いおかげで子宮の裏側まで届いてくれるのが悔しくも心地よい。しかもウナギは腸壁を啄むこともあったので、かつてない快感だけでなく、内臓を直接知られているというおぞましさも同時に込みあげてきた。

「出たって、はあ！ もう……出たって！」

ナイトミーナは首を振って意識を改めると、気張ってウナギを追い出そうとした。なかなか力が入らないので、息を止めて唇を噛んで顔を真っ赤にする。軟体生物の抵抗と粘り気の強い体液のせいで余計な音が鳴ってしまった。

ブリユブリユブリユ！

押し出されたウナギの体表と肛門が激しく擦れる。排泄と変わらぬすつきり感が全身を小刻みに震わせる。しかし表情は恥ずかしさでいっぱい、涙すら零していた。

「なんと品のない音でしょう！ 一流のマジシャンとは思えませんな」

「ついでに排泄したんじゃないだろうね？ おお、汚らしい！」

観客が股間を指さして大笑いするので、ミーナはまさか漏らしてしまったのかと思って



絶句した。途端に括約筋がひどく緩む。そこへ今度は一匹ではなく、二匹のウナギが突っ込んできた。先に肛門に頭を引っかけたウナギに続いて、もう一匹がうねりながら突進してくる。

「ひあっ……痛！ 二匹も、はあ、入っちゃだめ！」

菊門は閉まるどころかさらに媚薬を吸収して大きく開いた。それでもウナギを二匹も挿入するのはきついらしく、お尻の中がパンパンになる。腸内では一匹目を軸にして二匹目がしつこく回転して、媚薬を塗りつつ嫌というほど快感を叩き込んでくるので、気張って追い出すだけの余裕はなかった。さらにその二匹が、狭い腸内で交尾でもするかのように互いの軟体を絡みあわせ始める。一匹は右に、もう一匹は左にまわったため、腸壁を深さによって違う方向へ捻られる。

「んあ！ ああう……う、動かないで……！」

直腸で生き物を飼うという初めての試みだった。身体の芯と子宮の裏側を直接温められているようで、女怪盗の強固だった意志も少しずつ力をなくしていく。

(熱い……ヌルヌル、してる)

桃色の髪はガラスケースの中で、数匹のウナギによってしつこくかき混ぜられた。黒い生き物が紐リボンの輪をくぐったりして遊んでいる。新たに分泌された母乳は軟体生物の体液に混ざって乳房の全体に広がっていた。巨乳の下方で皺を寄せているボディスーツの

溝には鰻汁がたっぷり溜まっている。硬いはずの乳首にはウナギの菌形が残っており、吸引の強烈さを物語っていた。

「ま、まだ続けるっていうの？ ……はあつ、変態！」

フレアスカートはめくれたままで、ハイレグは片脚の付け根に食い込んでいる。ボディスーツはウナギが通った跡を深く変色させており、ガラスケースの底にはミーナの愛液と大量の鰻汁が溜まって層を成していた。マジシャングローブの中やタイツの中でもウナギは蠢いている。

ガラスケースの一部を取り外されたらしく、股間部に風があたった。

「安心せい、あと一匹で終わりじゃよ」

（最後って……まさか）

予想の通り、ウナギの頭が丸見えの陰部をなぞってくる。

（あ、あつ、あそこにあたってる！）

今度のウナギはおかしかった。頭をやたらと女性器に擦りつけてはくるが、ぬめる軟体でどこも這おうとしない。ただまっすぐ割れ目に突っ込んでくる。

「だっだめ！ はあつそこは入っちゃ、だめ……！ え、餌なんてないから！」

下等生物は人語を解するはずもなく、硬い頭部を強引に押し込んできた。股を閉じようとしても拘束されているためにできない。青ざめた顔で、湿った太腿を別のウナギたちが

這っているのを感じながら、少しずつ膣肉を抉られていく。

「そこだけはだめよ、お願いだからそれ以上入らないで……くうう！」

軟体生物にそう言い聞かせつつ、できる限り腰を捻って抗う。ナイトミーナはふと、いままでとは異なる感触に気がついた。

（硬い？ ……なんなのこれ）

これまでのウナギのどれよりも頭が硬い。感触からすると餌を啄むための口がないようで、とても太かった。ウナギとは思えないほどの幅にまで割れ目を広げられたが、まだ正体が見えてこない。ミーナは可能な限り頭を起こすと、巨乳の隙間にわずかに覗く自分の股間の現状を知って驚愕した。

「——！」

ウナギが身体じゅうを這っていることも忘れて口を開いたが、言葉は出ない。いつの間にか裸になっていた金成が、ケースの一部を外して、ペニスで女性器を抉っている。

「おお、ワシのウナギも餌を頂いておりますぞ？ ふえふえふえ！」

いまになって客席がやたらと騒がしいことに気がつく。経験のないミーナはしばらく唇を震わせてから、力いっぱい絶叫した。

「いや、いやあああああ！」

握り拳を作って涙目で訴える。そしてガラスを割ってやろうと激しく暴れる。

「やだ、やめて！ やめなさいったら！」

しかし硬いガラスとは逆に女怪盗の膾肉はすっかり柔らかくなっており、鰻汁の代わりに自らの愛液で内壁をよく滑らせた。陰毛が蜜を吸うことがないので、粘り気の強い愛蜜は陰唇を沈めるくらいの膜を形成している。

「さっきまでは素直に挿入されておったじゃろうが、こんなに濡らしおって！」

肉を歪ませてしか笑えない男は女怪盗を見下しながら、さらに腰を進ませてきた。このままでは犯されてしまうという恐怖でミーナの顔はすっかり青ざめて、唇は血の気を失っている。それなのに女怪盗の意志に反して、ヴァギナは軟体動物の体液に負けないくらいの愛液を次々と分泌しては、ガラスの底にトロトロと注いだ。二本のウナギをぶらさげた後ろの孔からも時折媚薬を噴き出す。

（いや……パ、パパ以外の人とセックスするなんて嫌よ！）

娘としては、父親以外の男に身体を許したくはない。怪盗ナイトミーナとしては、悪者ごときにここまで好きにされてなるものか。ヴァギナに意識を集中して力を込めれば金成の男根が後退する。しかしその隙にウナギたちが這いまわる速度をあげた。ハイレグのほうからボディスーツに潜り込んでいた一匹が、谷間から頭を出して、右の乳房をグルリと一周したらまたスーツの中へ戻っていく。別のものが乳首を強く吸引する。

「や！ じっとして……ひあ、はああっ」

第五章 ナイトミーナ、連続男根裁き

体育館の中には誓珠学園の大半の男子生徒が残っており、彼らが注目する舞台の上では女生徒がひとりお尻を床につけて座っていた。男子は二百人以上もいるというのに、舞台上の彼女以外に女子は見当たらない。見ていただけの連中も興奮を露にして、じりじりと舞台のほうへ迫ってくる。

怪盗ナイトミーナの姿は、噂とはまるで異なっており、若い男には刺激が強すぎるほどいやらしい肉体をしていた。幼さを感じさせる童顔で豪快なツインテールを結っている割に、その顔を支える首から下は見事なグラマーぶりで、紫色のボディスーツからはみ出した巨乳は特に目立つ。乳房だけはザーメンまみれで、ちょうど汚らしい白色のブラジャーをつけているようだった。胸は二の腕が隠れてしまうほど大きい反面、ウエストはとても細くて、その下にはほどよく肉のついたあられもない太腿がある。

ハイレグは繕られたままで、フレアスカートは前方を開いているので、美奈の股間は丸見えだった。陰毛を剃っているためにやけに幼く見えるが、そこはシャワーでも被ったかのようにズブ濡れになっている。恐怖のあまりタイツを履いた脚が震えて、グローブをはめた腕がガクガクと揺れていた。漆黒のハイヒールの踵が床を何度も擦る。

「は、話を聞いて……聞きなさいったら……」

胸から上は蝶ネクタイをつけているだけで、あとは裸同然の彼女は、まるでナイトサロ
ンで客を誘惑しているかのようでもあった。一見すると疲れきった表情をしているが、潤
んだ瞳は流し目のようで、漏れる吐息は甘ったるい。はだけた肩にかかった髪をどける仕
草がとても色っぽい。

しかし美奈には男を誘っているつもりなど決してなく、絶望のあまり眩暈すら覚えるこ
ともあった。歯をガチガチと鳴らして少しでも後ろにさがろうとするが、左手を鎖で床と
繋がれているためにほとんど動けない。

「いや、やめて！」

犯されでもしたら、もう学園にくることはできない。これだけの数の男性に犯されては
通えるはずがない。真っ青になった顔で、涙ぐんで戦慄する。

「だ、だめ……うそでしょ、あなたたち……犯罪なのよ……」

頭脳明晰な美奈は、今日がまさに危険日であることを理解しており、妊娠という最悪の
事態まで想像していた。美奈の怯える表情や仕草は、生徒会長としての彼女しか知らない
生徒たちにとってはとても新鮮で、面白かったらしい。

「犯罪したのはお前だろうが！ 警察に連れていかれないだけ、ありがたく思え！」

「よし、本番いこうぜ……誰から犯るんだ？」

新たに数人の男が舞台にあがってきたので逃げようとするが、恐怖のあまり脚が震えて、四つん這いでなければ進めない。涙ぐんだ瞳で訴えても誰も信じてくれない。

「話を聞いて！ あなたたちは、はあ、騙されてるだけで」

「みんな、確かに騙されてたよな！ 生徒会長に！」

美奈は四つん這いになると、逃げるために彼らにお尻を向けたが、生徒たちは彼女が自分たちを煽っていると勘違いしたようだった。次々と秘部に顔を寄せて、その形状を目でなぞってくる。

女性器のほうは、先刻のオナニーで潤滑剤をたっぷり分泌したあとなので準備が整っていた。陰核はめくられて腫れあがったままで、勃起のあまり割れ目を引っ張りすらしている。四枚のピラピラの根元には真っ白な地肌と、ずっとパイプを含んでいたためにパツクリと開いた孔がある。サーモンピンク色をした内壁の手前のほうには、さっきの放尿のせいか大きくなつた尿口があり、全体が愛蜜で粘り気を帯びていた。大粒の雫が零れて舞台の床を汚す。鎖で左手を繋がれているために逃げることはできず、お尻のほうから腰を掴まれてしまった。

「ちよっと待って……いやっ、やめて！」

「嘘はもういいって。挿れて欲しくてウズウズしてんだろ？」

ハイレグとタイトの間にある汗ばんだ太腿を、数人の男に舐められる。指とも牡肉とも

異なる感触が、最初はゾクゾクという悪寒を、次第に快感を背筋に走らせる。六本の陰茎を相手にパイズリしていた間に下半身に溜まった性的な鬱憤を、筋肉を解されるのと一緒に解消されていくようだった。

「はあ！ や、舐めたりしないで……んあつ」

ラベンダーの甘い香りが漂う。

「ナイトミーナのケツつて、いいニオイがするじゃねえか」

「香水だろ。セックスする気満々だな」

しかし花の香り以上に、パツクリと割れた秘裂から牝のにおいがする。いまにも腰が砕けそうで、マジシャングローブをはめた両手を床について踏ん張るしかない。汗が顎を伝って蝶ネクタイに染み込んでいく。下を向いた乳頭からも粘り気の強い雫が垂れた。

（力が……入らない！）

抵抗しようと思っても、昨夜からの凌辱で快楽を教え込まれた肉体は勝手に疼いて、男からの舌愛撫を求めてお尻を揺らすほどだった。四つん這いになっているために下を向いたクリトリスを男のひとりが吸引する。瞬間、嬌声で乾いた唇から甲高い声が漏れた。

「ひああ！ そ、そこ……だめえ！」

クンニによって生じる刺激の強さは美奈の想像を超えていた。ピンピンに張り詰めた肉を、熱くて柔らかい舌で少々乱暴に擦られる。陰核が硬く勃起しているために余計に舌と

ぶつかって、それだけ快感が生じてしまった。男性が女性に口淫させようとする気持ちで肉体で理解して、共感さえする。

(こんな……ものすごいなんて……！)

また愛液が溢れて、クンニをしていた男の顔を濡らした。牝のにおいが次第に強くなつて、ラベンダーの甘い香りをわからなくする。美奈は乳頭が床につきそうなくらいまで上半身の高度をさげる一方で、お尻の位置を高くして自ら男の舌を求めた。見た目には本当に痴女のように、床についていたはずの両膝がわずかに浮く。

「あん！ やあ、やめて……はあ、はあん！ あん！」

抵抗するための力が入らないのに、愛撫を求めてお尻を持ちあげるための力を出せる。タイツを履いた両脚がビリビリと痺れても折れてしまうことはない。お尻よりずっと低い位置では、怪盗ナイトミリーナが己のはだけた右肩に甘い吐息をかけている。美奈は耳や蝶ネクタイに絡まった黒髪を払うこともせず、口を大きく開けて喘いだ。

「っはあああん！」

床に這いつくばるような姿勢で、流し目にしか見えない目つきで男たちを見上げる彼女の痴態は、まだ躊躇していた男子生徒たちを興奮させるためには充分すぎた。司会役の男子が傍によってくる。

「な、なあ……もういいんじゃないか？」

美奈はその生徒が助けようとしてくれたのだと思ったが、彼の姿を見て真っ青になった。彼もすでにズボンを脱いで勃起したペニスを晒している。生徒会長としてではなく、本当に変態女としてみなされていることを思い知る。

「そうだな、これだけ濡れてりゃ充分だろ。誰からいく？」

「はあ、オレからいいか？ もう我慢できねえよ！」

美奈は震えながら、もう一度犯されたあとのことを想像した。

(犯されちゃう……う、うそよ……)

このままでは学園にいられなくなる。汚れた身体で大好きなパパに会う勇氣はないので、家に帰ることもできない。かつてない絶望に涙ぐんで鼻をすする。しかし秘部からは大量の愛液が溢れて、牡肉が入ろうとすれば素直に左右に割れた。膣内にある棒状の肉の感触が次第に長くなっていく。

「いっいやああああ！」

名も知らぬ男は少女の絶叫にまったく動じず、四つん這いになった美奈の秘裂にズブズブとペニスを沈めてきた。ずっと電動バイブで扱られっぱなしだったせいで股間に力が入らないが、確かに肉ならではの感触がする。盛りあがった龟头冠で輪状に広げられた膣肉が、間もなく締まって雁首に絡みつけば、ツインテールを振りまわして喘ぐ。

「抜いて、い、挿れないで……ひああ！」

昨夜金成に犯されたときも、さつきパイプで抉られたときも、最初は決まっておあずけを食わされていた子宮を、いきなり怒張で小突かれた。股間ではなくお腹の中で感じられるだけに、犯されているという実感も強烈に込みあげてくる。陰茎は根元までズップリと肉壺に納まっており、汚らしい陰毛が女怪盗の美尻と接触した。ペニスが弓なりに反りあがっているために、膣壁の後方に大きな力がかかる。

(は……入ってる……いい、いや……)

昨夜の破瓜を思い出して身震いする。それなのに秘裂は濁った蜜を溢れさせて、男根がパイプのように回転しないことが不満なのか、膣肉が激しく疼いた。襲という襲が牡肉に強烈に絡みついて、ペニスをまわそうとさえする。挿入している男は強すぎる膣圧のせいか汗までかいていた。

「すげえ締めつけたな……くっ、オレのチンポはどうだ？ やっぱり、さつきのソーサーのほうがいいか？」

「美術品でないと感じられない変態だったら、どうするよ？」

他の男たちが陰茎を深く呑み込んだ割れ目に注目する。わずかに白濁した汁を垂れ流している陰部は、ペニスを締める力があまりに強いためか充血していた。真っ赤に腫れあがったクリトリスは肉棒の表面をへこませるほど硬い。相手はフレアスカートをめくって、ハイレグを食い込ませたお尻に両手を添えると、ゆっくりとピストンを開始した。

「チンポでも感じるかどうか、オレが試してやるよ……お、おおっ」

「か、感じるわけ……はああん！」

太い男根が狭い膣内を強引に往復する。ペニスが進むときは肉を割られていくような、後退するときは硬い亀頭冠で内壁を引っ掻かれるような感覚がして、併せて甘い吐息が漏れた。床についた両手の肘から先が震えて、男の肌と直接ぶつかるお尻や太腿で汗をかく。怪盗ナイトミーナが舞台の上で犯されていた。

別の集団の接近に気がついた美奈が、漆黒のツインテールを揺らして振り向くと、すでにズボンを脱いだ男子が何十人も並んでいるのが見えた。

「い、いや……うそでしょ、そんなにされたら……！」

顔が真っ青になったが、後方から迫ってくる快感のせいでまた瞳が蕩けそうになる。眉尻が次第にさがって頬が紅潮する。二百人近い男子に見られている恥ずかしさすら、昨夜からずっと凌辱されっぱなしの肉体にとってははや快感らしい。

「感じていいんだぜ？ はあ、それとも、美術品じゃないと感じられないってか？」

「そんなこと……ひあ！ はあ……あ、っあん！」

感じてなんかないと必死に念じてても、乳首が膨らんで、菊門すら疼く。自分の身体が自分のものでなくなっているような気がして、眩暈すら覚える。

（犯されて……気持ちいいわけ……はあ、誰か……。パッパッ！）

このままでは綺麗な娘でなくなつて、パパに会わせる顔がなくなつてしまふ。なによりもそれが恐ろしくて、美奈は涙すら零した。しかし絶望で青ざめていたはずの顔は紅潮して、色っぽい目つきでぼんやりと宙を見詰めている。巨乳が表面に付着したままの白濁汁を乳首からポタポタと落下させれば、秘裂からも粘り気の強い蜜が溢れて、相手の陰毛が愛液を挟んで肉棒にへばりつくころには、美奈の思考も白濁していた。

(ラベンダーの……におい……)

犯されているという現実の中に漂う、ママから貰った思い出の香り。そのせいか、巨乳にぶちまけられた精液のにおいまで甘く感じられる。昨夜から着っぱなしのボディスーツは大量の汗を吸収しており、美奈の肢体に密着していた。グローブやタイツもたくさんの汗を吸って肌へべりついている。

四つん這いで犯されているナイトミーナを見て、さらに興奮したのか、いままでは見ているだけだった男たちも集まつてきた。下を向いて隠れている巨乳が気になるらしく、美奈の両手を掴んで上半身を起こそうとする。

「な、なにするのよ！ やめ……ひああ！」

咄嗟に我を取り戻したが、上半身を起こしたせいでヴァギナにこれまで以上の圧力がかかって、また瞳が蕩けそうになった。甲高くて甘い嬌声を漏らしてから、はだけた肩を上下させてなんとか呼吸を整えようとする。四つん這いとは違って、上半身の重みがすべて

肉壺にかかるようで、巨乳が揺れるたびに膣圧が変わった。おかげで余計に男根の形状を思い知らされてしまう。

「はあ……と、とまって！ 身体が……んあ、おかしくなっちゃう！」

いまにも緩んでしまいそうな表情をきつくして、手を伸ばす男子を説得しようとする。しかし彼らは生徒会長の言葉には耳を貸さずに、彼女の白濁した巨乳に手を這わしてきた。ザーメンまみれのその肉をためらうことなく揉み解してくる。

「す、すげえな……これがナイトミーナの……オッパイかよ」

乳肌に付着していた牡汁をさらにしっかりと塗り込まれるようで、付け根から先端までを隙間なく撫でられる。精液の量は、彼らが触るとヌチャヌチャと音を立てるほどで、乳房全体がいつもより重くなっている気がした。ペニスから出た汁を素手でかきまわす男子をおぞましく思う。彼らはボディスーツの布地を引っ張って、乳首に付着した精液を軽く拭くと、それを頬張って吸引までした。

「ひあ……だ、だめ……はああ……！」

クリトリスに負けないくらい硬く、そして敏感な尖りを、口内で温められたうえで舐められる。乳首の付け根といった、柔らかい舌でなければ届かないような箇所まで丁寧にねぶられる。股間の感覚と合わせて甘さを三倍に増した電流が美奈の身体じゅうを巡った。ハイヒールを履いた脚から力が抜けて、肉壺に全体重を預けてしまう。

「あん！ あ……あつあぁ」

相手の男根が美奈の体重を支えるかのように張りを増す。ナイトミーナは眉尻をさげて、男の腰の上で一瞬とはいえ力なくなだれた。陰茎を深く啜え込んだ秘裂から濁った蜜がドロリと溢れる。

（このままじゃだめ……な、なんとか……しないと！）

美奈は自由な脚で搾乳を妨げるため、両膝を胸元までもってきた。その甲斐あつて男が乳房を揉んでいられなくなる。すると彼らは、太腿とふくらはぎの間に新しくできた肉の溝に目をつけた。

「ここでもやれそうだな。いい具合に肉がついてよ」

男のひとりが、右膝の裏側に強引に陰茎を押し込んでくる。力を込めて抗ったが、ペニスに肉を割るという感触で肉体が疼いて、陰部からまた愛液を零れた。脚を強く閉じれば閉じるほど、陰茎の感触を思い知らされた。

「やめて……はあ、そんなとこ、んあ、あん！」

左右の太腿とふくらはぎの間から出てきた亀頭に色っぽい眼差しを向けて、まるで女性器に挿入されているかのような声を漏らす。悔しくも仕草のすべてが痴女めいて、男どもを煽ってしまう。

「本当に感じてるぞ……なあ、次はどこに挿れてやろうか？」



美奈は拒絶の意志を込めて太腿をいっそう強く曲げたが、好んで陰茎を締めているようにしか見えなかった。真つ白な太腿の間にあるだけに、ピンク色の亀頭はよく目立つ。その肉塊が太腿とふくらはぎの間に引つ込んだり、また現れたりを繰り返すのが恐ろしかった。どうしてそんな奇怪な動作をするのか美奈にはわからない。

「き、気持ち悪……はあ、あめなさいったら……んはあ」

太腿で感じる牡肉がどんどん硬く、熱くなってきた。ふくらはぎに睾丸がぶつかるくらいの勢いでストロークを見舞われる。性器ではないはずの美脚にも甘い電流が巡るようになって、ハイヒールの中に隠れたつま先が痙攣する。見た目には器用に膝の裏側でペニスを扱っているようでありやらしい。さっきの演説の間に散々愛液を被った脚の肉はとても滑りがよくて、女性器のように、肉棒が前後すればクチュクチュという音を立てた。

「あっ！ はあ……はあ、ああ、はあん！」

両脚を曲げれば、それだけ割れ目が狭まって、四枚の陰唇が男根に絡みつきさえする。太腿ではない本当の女性器もグチュグチュと音を鳴らして、男の下半身にまで愛液を伝わせていた。不意に腕の拘束を解かれる。腕を掴んでいたふたりが、我慢できなくなったのか、丸出しのペニスを構えて彼女の肌になすりつけようとしてきた。

「生徒会長、オレのも！ チンポならなんでもいいんだろ？」

美奈は咄嗟に抵抗するための力を取り戻して、マジシャングローブをはめた両手で迫り

くる二本の陰茎を掴み取った。そして自分から遠ざけようとする。相当に力を込めたので、男根の雁首や裏スジ、浮き出た血管を指で強く圧迫する。

「こっこないで！……はあ、近づけ……ないで」

ペニスを掴まれた男が繰り返し腰を寄せてきたので、対抗すべく何度も男根を押し遣ると、その一連の動きがストローク同様になってしまった。

「今度は手でやるってか、よしやってみる！」

グローブの布地越しに感じる牝肉の感触が次第に硬くなっていく。美奈の指を押し返すくらい張りを増して、閉じていた鈴口をパツクリと開く。ナイトミーナの指は器用に陰茎を扱いて、その激しさは根元の睾丸をブラブラと揺らすほどだった。表面がツルツルになるまで腫れあがった龟头が先汁を滲み出す。ラベンダーの香りと精液のにおいがごちゃまぜになって嗅覚を突くので、美奈は軽く錯乱もした。

（硬い……びくびく、してる……）

まるで手品のタネでも仕込むかのように、陰茎に浮き出た血管をなぞりつつ、粒状のカウパー液を親指で押し潰す。右のペニスを掴めば右の乳首が、左のペニスを握れば左の乳首が膨らんだ。自分の性感帯を愛撫しているようで、相手が腰の動きを止めても、グローブをはめているために真つ黒な手で肉棒をシュッシュッと擦ってしまう。

「だめ……こないで、はあ！ はあ……はあ」

口ではそう言いながらも、ナイトミーナの表情はだんだんと悦楽に染まりつつあった。世紀の女怪盗が、陰茎の上に腰を降ろして、そのうえ二本を両脚で扱っている。背中をほとんど露出させた紫色のボディスーツやハイレグのせいもあって、怪盗というより痴女めいていた。黒い瞳はまだ強い輝きを保っているが、さがった眉尻や甘い吐息は確実に悦楽に沈みつつある。

「すげえな……チンポまみれだぜ」

漆黒のツインテールも牡肉で繰り返し梳かれている怪盗ナイトミーナは、男のひとりが呟いたように、まさに「チンポまみれ」だった。別の男根が彼女の左頬にめがけて突っ込んでくる。

「やばいって、ナイトミーナが扱ってるの見てたら……我慢できねえ！」

牡肉を顔に向けられた美奈は悲鳴をあげた。

「いや！ な、なにをする気よ！」

後ろにさがって逃げようとしても、膣孔に男根を挿入されているために動けない。黒髪を絡めたペニスが苦悶の吐息を漏らす少女の唇に割り込んでくる。一瞬息が詰まって、瞳から涙が零れた。

「んっんうむ！」

その涙が眉間から鼻の横を伝って、陰茎を啜えた唇を潤す。ペニスならではの苦味がす

る。真っ赤に染まった頬をもごもごと蠢かせて、舌で追い出そうとしたが、相手は容赦なく腰を振って陰茎をストロークさせてきた。舌の根っこにある窪みに溜まった唾液がかきまわされてヌチャヌチャと卑猥な音を立てる。激しい呼吸をまかなうために口を大きく開けば、髪に絡まっていた山吹色のリボンまで吸い込んでしまった。

「んんっ！ ん……っんぶ！」

声を出せず、首を振って逃げることもできない以上、握った男根を強く引つ張るくらいしかできない。舌と二本の親指で、微妙に形状の異なる鈴口を擦りまくる。口の中を動き回っていた男根が間もなく張りを増して、舌を喉のほうへ逆に押し遣ろうとした。

「ん……んむ！ んむう……んっ！ んんう！」

男根が限界近くまで勃起すれば、狭い口内を動き回ることにはなくなったが、そのせいで舌で押し返そうとしてもまるで効果が無い。ピンピンに張りを増した肉を柔らかい舌で押しきることはできず、亀頭の表面を勢いよく舐めてしまっただけの結果に終わる。口淫の相手は、美奈の舌遣いを積極的なものとして解釈したようだった。

「はあ！ 上手いじゃねえか……エロい顔でしゃぶりやがって！」

どうしても下半身から込みあげてくる快感で表情が緩んでしまう。顎から力が抜けて、口でもペニスのストロークを許してしまう。唇から零れた唾液が乳肌を濡らせば、それだけで乳房の全体がピクンと跳ねた。男の突き込みに合わせて蝶ネクタイも前後する。抗う

ために舌で渦を描けば、相手は悦んで、美奈は牡肉の味を思い知らされた。

「んむ……はあっ！ はあ、んっ……んむ！」

声を出そうにも口は塞がれている。出せそうになっても、肉壺への突き込みで喘いでしまつてなにも言えない。膝を胸元に寄せても巨乳のほとんどを隠すことはできず、乳房の両側面でも陰茎による接触を許してしまう。

「ナイトミーナ！ オッパイでされるのも好きなんだろ？ ほら！」

ふたりの男はまるで女性器に挿入するかのようになり、それぞれ肉の房に両手を添えて腰を進ませてきたので、物凄い力が胸肉にかかった。勃起した乳頭が左右に揺られて抗つてみせるが、牡肉は構わず乳房を押してくる。指とも口とも異なる感触が次第に硬くなつていく。

「ひいあ！ あ……はあっ！ 押さないで、んんむ！」

しかし美奈の巨乳も負けてはおらず、形を取り戻して牡肉を追い返した。先程被った精液が潤滑剤代わりになってペニスを滑らせてもくれる。それでも男たちは諦めず、乳房を繰り返し怒張で突きまくつてきた。乳房が大きいだけに、その表面から伝わってくる快感の量も膨大で、軽く意識が飛びそうになる。ペニスを咥えている口元が緩んで、涎と一緒甘い吐息を漏らす。

しかも下半身では、ヴァギナを犯されているのみならず、あられもない太腿とふくらはぎの間を使つての擬似セックス。硬くて大きなペニスがいまも肌の間をいつたりきたりし

ている。その先端からはトロトロとカウパー液が溢れており、張った亀頭は強烈な締めつけのために汗をかいているようだった。両手でも、口でも、乳房でも、髪でも、太腿でも、そして肉壺でも硬い男根がいたり、きたり。反りあがった陰茎が膣肉を穿りまわす。

「つあああ！ ……やめ、はあ、動かないで……ひあ!？」

美奈は男根を吐き出して、なんとか言葉を作ろうとしたが、お腹の中でいよいよ生じた圧迫感に絶句した。ハイレグを片側に寄せた股間から、お尻の丸みにそって、背筋を越えてなお上昇してくる熱い電流で全身を痙攣させる。握らされた陰茎をめいっばい捻って喘ぐ黒髪の怪盗ナイトミーナ。

「あん、はあ！ あん！ ……はあつあ、ああん！」

世紀の大怪盗が金成に敗れて、犯されている。人望の厚かったはずの生徒会長が、ただの変態とみなされて、身体じゅうをペニスで犯されまくっている。ナイトミーナとしても愛原美奈としても、絶望ばかりが込みあげた。それでも、憎らしくも身体じゅうから脳天を突きあげてくるのはかつてない快感で、流砂に呑み込まれるように、少しずつ、確実に悦楽に沈んでいく。

「んあつはああ！」

閉じた股間からはジュクジュクと愛蜜が溢れて、すぐ下では醜い睾丸が揺らいでいた。フレアスカートがめくれあがれば汗ばんだ脚の付け根までが見える。膝の裏に挟まったま

まの肉棒もピストンの速度を増して、半透明の雫をスカート山の吹色をした布地に零した。いまにもバランスを崩しそうな姿勢だったが、両膝を押さえられているので倒れてしまうことはない。しっかりと支えられたうえで蜜壺を男根でしつこくかきまわされる。

「ひあっ！ 止めて、はあ！ や、あん！」

高熱を帯びた膣肉の中で、肉棒がググッと張りを増した。相手も限界が近いらしく、呼吸をひどく乱している。

「やべ、もう出る！ はあ、はあ！ 膣内ですぞ！」

美奈は絶望と恐怖のあまり涙ぐんで、必死に言葉を繋いだ。

「やめて……いや、それだけは……はあっ」

危険日に違いない今日、膣内に出されでもしたら妊娠してしまう。少女にとっては酷過ぎる想像が美奈の涙腺を緩ませる。女子に嫌われて、親友を失い、男子にここまでされてはもう学園にはこられない。

（いや、パパ……あたし穢されちゃう！）

そのうえ、もうパパの綺麗な娘でいられない。穢された身体で愛する父親に甘えることなんてできない。なにより妊娠への恐怖が彼女に絶叫すらさせる。

「だ、だめ……パパ、パパああ！」

思わず父親を呼べば、傍にいる男たちがどつと笑った。

「おいおい、生徒会長ってファザコンかあ？」

「パパにどうして欲しいんだよ。イかせて欲しいんだろ！」

張りを増した男根がさらにストロークの速度を増して、美奈の肉壺を責め立てる。グチュグチュと物凄い音が鳴って、そのたびに甘い電流が脳天まで流れ込んだ。身体じゅうが大量に汗をかいて、次第に震えが止まらなくなる。硬くなったクリトリスも休みなく陰茎と上手に擦れて、美奈の理性を翻弄した。

「はあ！ だめ、とまって……ひあ！ あん！ はん、はあん！」

絶望に歪んでいたはずの表情は緩んで、眉は「八」の字になっている。また唇を陰茎で塞がれて、口内をかきまわされると、激しい呼吸と大量の唾液のせいでズッチュズッチュと卑猥な音が鳴る。本当にナイトミーナが自らしゃぶっているようでいやらしい。

「んむっ！ ……あん、ああ！ ……はあっんむっ……んああ！」

快感に吞まれてはいけないという気持ちが強くなるほど唇が締まった。説得の言葉を繋ごうとして舌を暴れさせる。そうして口奉仕を進めてしまう。

「くっ！ 口のほうもすごいぞ、瞬殺だぜ……そんなにチンポが美味いか、変態！」

行為を強要されているだけに、変態呼ばわりされることが悔しい。しかしなんとか口を開いても、出てくるのは涎や嬌声ばかりでなにも言えない。射精を恐れて、唇を締め、股間に力を込めると、陰茎の打つ脈が不意に速くなった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>